

2006年12月に完成した第2メコン国際橋は、JICAが詳細設計調査を行い、その後、建設のための円借款が供与された。これによりベトナムからミャンマーまで、インドシナ半島を東西に横断する約1450キロの「東西経済回廊」がほぼ開通。以前は海上ルートで約2週間を費やしたタイ・バンコク、ベトナム・ハノイ間の物流が、

陸路で約3日にまで短縮された。入国管理事務所では、到着したシャトルバスから大きな荷物を抱えた旅行者がどっと降りてくる。入国審査の担当職員によると、ここでの出入国は1日に1000人を超えるという。すでに1日20便以上のシャトルバスが両国を行き来しており、乗客は、最近サバナケットにオープンした商業施設目当てのタイ人観光客、出稼ぎや商品の仕入れなどでタイに渡るラオス人らが中心だ。

肌を焦がすような日差しが厳しい4月中旬、タイ東部・ムクダハンから、ラオス中部・サバナケットに向かうため、メコン川に架かる「第2メコン国際橋」を渡った。眼下に望むメコン川の川面に、照りつける太陽がキラキラと輝いている。

整備が始められた場所も多く、本格的な稼働はこれからだが、優遇政策による国内外からの投資の呼び込みを力を入れ、一部ではすでに企業が集まり操業を始めている。今後、大規模な工場や倉庫、貨物のターミナルのほか、ホテルや住宅などが建設される予定で、現地の雇用拡大にもつながるものと期待されている。

貨物を積んだ大型トラックが、タイ・ムクダハンから第2メコン国際橋に入り、対岸のラオス・サバナケットを目指す。タイ側の出国審査を終えると、左側通行(タイ)から右側通行(ラオス)へと車線が変更される

国際橋の完成と 東西回廊開通を呼び水に 地域経済の活性化を図る

橋の全長は約1600メートル。大型トラックやタンクローリー、大勢の客を乗せた国際シャトルバスが、眺望を楽しみながら、合掌した手の形を連想させる、橋を吊り上げる2本の巨大な支柱を通り過ぎると、程なくラオス側の入国管理事務所に着した。

近年、成長著しいメコン地域では、道路や橋といった国境を越える交通インフラの整備が、日本の支援などによって進められている。JICAは、国境税関システムの整備などを通じて、メコン地域の発展と統合を後押しするための支援に力を入れる。ラオスとタイを訪れ、こうした協力で変わりつつある地域や人々取材した。

メコンの 発展を導く 地域の統合を



円借款としては、初めての2国間にまたがる広域インフラ整備となった第2メコン国際橋の建設。日本の企業を中心に、タイ・ラオス両国の企業や技術者が参加して工事が進められた

写真：久野真一





ノンカイ税関で、職員と税関業務の進め方を確認する宇野専門家(右から2人目)



サバナケットの観光資源を広く知ってもらうため、JICAの支援でさまざまな種類の観光パンフレットが作られた。空港やバスターミナル、ホテル、レストランなどに置かれている

「リスクが高いか、低いかの判断には、個人の過去の履歴や違法取引の傾向など、データを使った分析が重要です」。セミナーに毎回出席し、

域内の経済規模や制度面での格差など、残された課題も少なくないが、国境をまたぐ交通インフラの整備や税関業務の迅速化などにけん引され、メコン地域は経済統合に向けて力強く走り出した。そのダイナミックな変化は、今後、国際的にも大きな注目を集めそうだ。

実施など、情報発信にも力を入れている。

「JICAの支援でサバナケットの観光資源が知られるようになり、国内外からの観光客が除々に増えている」と喜ぶのは、サバナケット観光局のブーンミー・カンチボン局長。「この地域が、タイとベトナムを結ぶただの通過点になってしまっただけではない。観光振興を通じて、東西回廊を通る人々を呼び込んでいきたい」と力強く語る。

税関業務の迅速化と違法取引の監視強化により国境での流れを円滑に

一方、ラオスの首都ビエンチャンからタイ東北部の町ノンカイにつながる国際橋(通称「友好橋」)は、トラックやシャトルバスがひっきりなしに通り、両国の入国審査の窓口や荷物の検査場に並ぶ人々の列が続く。一角には、大型車両をそのまま透視できる巨大なX線検査装置も見える。

タイ側のノンカイ税関は、08年2月からJICAが行う「メコン地域における税関リスクマネジメントプロジェクト」のパイロットサイトの一つ。メコン地域の経済活性化のためには、国際橋のようなインフラ整備とともに、国境を越えるヒトやモノの円滑な移動がカギとなる。そのため、域内の往来がより活発になる中、通関手続きの迅速化と、違法取引を防ぐ国境での監視強化が重要な課題となっている。JICAでは、麻薬の密輸や模倣品といった違法性の高いものを確実に摘発し、同時に安全な貨物・荷物や人の越境手続きを簡素化するための「リスクマネジメント」能力の強化に取り組んでいる。タイ、カンボジア、ベトナムの3カ国の税関を対象に、職員と組織の能力向上を図り、各国での定期的な研修や、3カ国合同のセミナーなどを開催している。

去年は日本での研修にも参加したという、ノンカイ税関職員のウイスタサック・カーバンクラチャンさんは言う。「より精度の高いデータ分析の手法や、リスクの判断が難しいグレーゾーンの取り扱いなどについて、日本の事例から多くを学びました。税関業務の円滑化や時間の短縮化に大いに役立っています」と、その成果を述べる。

支援を取りまとめるのは、日本で税関の要職を長年務めた経験を持つJICA専門家の宇野悦次さん。「メコン地域の結び付きが強まり、国境の往来が増えている中で、安全なものは素早く通し、逆に社会の安定を脅かすものはしっかりと摘発していくことが必要です。JICAの支援をきっかけに、将来的には、域内共通の税関システムの構築につながれば」と期待を寄せている。

ラオス国際橋管理事務所のアラット・バハニット副所長は、「以前、ここはタイとラオスを結ぶ小さなフェリーが通るだけだったが、国際橋の完成でヒトやモノの流れは大きく変わった。今後、経済特別区への企業進出や投資が拡大すれば、往来もより活発になり、地域一帯の経済発展につながるだろう」と期待する。

また、メコン地域で物流事業を展開する日本ロジテム株式会社の杉山恵一さんは、「最近では、ラオスで採れる鉱物や、今年開業したタイ系砂糖工場などからの貨物輸送の需要が目立って増

えている」と、地域経済が大きく動き始めたことを日々実感している。同社では東西回廊の開通を受け、07年より経済特別区内に拠点を設けており、今後も回廊を利用した国際貨物の陸上輸送に力を入れていくという。

さらにJICAは、東西回廊を呼び水にした経済活性化策として、サバナケットとその周辺地域の観光振興を支援している。サバナケットには、フランス植民地時代の歴史的建造物や、由緒ある仏教寺院などがある。だが、以前は観光客の受け入れ態勢が整備されておらず、観光情

報の発信やプロモーションも十分ではなかったため、訪れる人々も少なかつた。最近、利用者が急増している商業施設も、地域全体に経済的効果を波及させるまでには至っていない。

そこでJICAは、サバナケット県の観光振興計画の策定のほか、案内所やホテルといった観光客の受け入れ施設に配る観光案内マニュアルの作成などを支援してきた。また、モデルルートを示したパンフレットとポスターの作成、観光案内ウェブサイトの改善、メディアや旅行会社を対象とした体験ツアーの



国際シャトルバスで橋を渡り、サバナケットに到着したタイ人観光客



サバナケットでタイ人観光客が入国審査を受ける。現状ではタイ出国時にも手続きが必要なことから、審査が一度で済むワンストップ・サービスの導入が現在進められている



2009年3月に開通したノンカイ〜ビエンチャンを結ぶ国際列車。友好橋を渡りラオスに入る。その利便性から、日帰りビエンチャン観光に訪れるタイ人観光客が増えている



バスの収納スペースを検査するウイスタサックさん。ノンカイ税関を通過する車両の数は、1か月に約20万台